

ずいそう

## 景観は心映す鏡

橋本公文



前は海、後ろは山という日本の典型的な風景である沿岸地域に生まれ育ったお陰で、自然を満喫した子ども時代を過ごすことができました。ただ、農業用の用水路はありましたが、川だけが近くになく、このためか、一級河川のような大きな川にあこがれていました。

念願かなって20年近く前、東京と千葉の界にある江戸川まで、直線距離で50メートルくらいの場所に引越しました。ちょうどそのあと、社内異動で内勤に変わったので、運動不足を解消するために江戸川の土手を週末、ジョギングすることにしました。仕事柄、歩くことと立っていることには慣れていますが、考えてみると、走ることは学校を卒業後ほとんどしていませんでした。

最初はどの程度のスピードで走ればよいのかも分からず、500メートルくらいですぐに息が上がりました。土手の上は360度のパノラマ風景を楽しむことができますが、最初は走るだけで精一杯のため、周りの景色を眺める余裕は全くありませんでした。

ジョギングを始めて、川を利用する人が意外に多いことに気づきました。朝も薄暗いうちから、年配の方が一人で、あるいは夫婦でウォーキングを楽しんでいます。明るくなってくると、犬を散歩させる人が増えてきます。休日の昼間はジョギングやサイクリングのほか、河川敷のゴルフ場でプレーする大人やグラウンドでは小学生が野球やサッカーの地元チームで一生懸命に練習しています。時間帯によって川に集まる人の年齢層が異なっています。

もうひとつ気づいたことがありました。それはごみです。スーパーのレジ袋やお菓子などのビニール袋、空き缶、空き瓶といったごみのポイ捨てに加え、乗らなくなった自転車、不要な家電製品などなど。道路に捨てられたごみは割と早く片づけられます。それは、近くの家の人々が掃除をするからです。

道路は私有地に近接しているので、公共空間とはいえ自分の縄張りという意識が働くとされます。ですから、家の前などにごみが落ちていたりすれば拾って片づけられます。これに対して川は人家から離れているケースが多いため、ごみを拾っても自宅まで持ち帰らなければなりません。また、家の前の道路は毎日利用しますが、川に毎日行く人は限られているので、ごみが落ちていてもそのまま放置されがちです。

数年前、中村良夫東京工業大学名誉教授の景観をテーマにした講演を拝聴する機会がありました。中村名誉教授は、現在の景観に日本の病理の部分が表れているという趣旨の話をされました。景観と日本の経済・社会と何の関係があるのか、最初は全然理解できませんでした。話が進んでいくうちになるほどそういうことかと納得しました。

人の心が穏やかで余裕があるときは、道徳やマナーを守り、地域社会に迷惑をかけないように生活しようとします。しかし、金儲けなど経済優先に陥ってしまうと心がすさみ、自分一人だけが良ければ、あるいは得をすればという考えになり、他人の迷惑を顧みることもなくなります。

日本の昔からの美しい景観が最も破壊されたのは高度経済成長の時期でした。誰もが経済を最優先させることに夢中で、これに邪魔なものは容赦なく壊されました。

講演を聞きながら、ふるさとのことを思い出しました。小学校に通った道は松や桜が植えられていて美しい風景でした。しかし、校舎が木造から鉄筋コンクリート造に建て替えられたころ、自動車の交通量が増えたことに伴い舗装や拡幅が必要となり、すべて伐採されてしまいました。この結果、自動車の通行は確かにスムーズになりましたが、スピードを出して走るため、高齢者や子どもにとっては歩きにくくなりました。

景色よりも経済的に豊かになることが大事だと考えるようになれば、当然、景観は悪化します。景観は人の心を映す鏡で、心が荒廃すれば景観も荒れるというわけです。ごみのポイ捨ても同じことです。ルールを守り、他人に迷惑を掛けないという気持ちが失われれば、街は汚れます。

逆に言うと、美しい風景を守り、ごみも落ちていない街というのは、人の心にゆとりがあり、住民同士のコミュニケーションも良く、犯罪は少なく、住みやすい場所といえます。

これからは本格的な人口減少のために、高い経済成長が見込めないとされています。戦後、一貫して追いついてきた経済成長から、心の充足に少しずつウエートを移していく時期になっているのではないのでしょうか。